あとがき

横山俊夫

共同研究班「東アジアの日常における両界媒介事象の比較研究」(1994.4－1997.3) の報告を公表するにあたり，班長 三浦國雄氏（上記期間，当研究所客員教授）の意向もあり，紀要『人文学報』の誌面を使うことになった。

章立ては，寄せられた論文の特性をもとに，つぎの四領域に分けて順次配列した。まず，『玉匣記』や『大雑書』といった書物の検討（三浦論文，横山論文)。それらは東アジアの人びとの暮らしを天地のあいだに日日鎮める媒介でありながら，これまで，あたかもヌエのように全貌をあらわさなかった。ついで，衣食という，人間の生命のかたちを深いところで定める媒介の考察（木島論文，キンスキー論文，北畠論文)。そして，国や異界をめぐる多彩な観念的媒介の解明（都築論文，原田論文，金論文，深澤論文)。衣食も観念も，時代とともに大きく変容するかに見えて，変わらぬ何かが今も続く。なぜかという問いが，より深いところから呈される。最後が，文字や音声や身体がはたす媒介機能の諸相の分析（ルビンジャー論文，後藤論文，藤田論文)。文字言語が文化に占める位置の再考をうながす。

およそ生命あるところ，否，非生命界も，媒介としての働きを一切なさずに存在するものはない。媒介者や媒介物は，これまで主たる個体間を仲立ちするものとして，いわば脇役，背景，環境と見なされがちであったが，現実世界の複雑さをそこなうことなく捉えようとすれば，つまりかかわりある生物や非生物それぞれの重さをそのままに受けとめようとすれば，むしろ仲立ちこそ，さらに言えば，仲立ちが生み出す〈間〉や〈組み合わせ〉こそが，つぎのコトを生起させる存在であるとの前提に立ったほうが良い。このような見方は，世界をまず構成要素に分け，その「主」たる個体の構造を調べるという方法とは根本から異なる。習得すれば，より自由で柔軟な視野，そして別の世界像をもたらすかもしれない――当研究班はこのような期待から出発した。本誌に掲げたさまざまな事例研究で，その期待がどの程度実現されているであろうか。読者からのご意

見，ご批正をお待ちしている。

この共同研究班が組織された背景には，人文科学研究所の別の共同研究班「貝原益軒とその時代」（1988.4－1992.3）が所外に生み出したふたつの学際研究活動があった。ひとつは京都ゼミナールハウス主催の国際セミナー「安定社会の総合研究」（1989.8－1999.1）であり，いまひとつは，株式会社けいはんな主催の「マラソンセミナー／人間・生物・時間」（1992.10－）である。比較的安定した生物社会や物質循環系においては，構成要素が互いに一定の領分を占めていわば「静」の次元を形づくるとともに，それらを，間合いをとりつつ繋ぐ媒介や媒介者が「動」の世界を膨らませる。三浦氏を班長とする当研究班の活動時期は，じつはこれらのセミナーのいくつかの集中討論と重なり，それぞれ得難い示唆を与え合うことになった。

なお，この共同研究班活動の副産物として，科学研究費補助金によるふたつの基盤研究，「久米島における東アジア諸文化の媒介事象に関する総合研究」（1996.4－1999.3/課題番号0809006），「前近代久米島文化の復元 ―― 未公開家文書群の学際的実地検証をふまえた解読による ――」（1999.4－2002.3/課題番号11309005）が展開したことも記しておきたい。

本報告書を作成するに当たり，研究会の席上，興味深い研究発表や議論をされながら，人事異動はじめ諸般の事情で，残念ながら原稿は頂けなかった方がたがおられる。お名前を，当方の謝意とともに記しておきたい。井波陵一氏，梅谷繁樹氏，齋藤希史氏，ブリギッテ・シテーガ氏，瀧井一博氏，塚本 明氏，ロナルド・トビ氏，西山 克氏，羽賀祥二氏，藤井譲治氏，藤井正人氏。とくに藤井譲治氏は，当研究班発足の準備と当初の運営において，肝煎の一人として尽力された。

編集にあたり，瀧井一博氏と横山が原稿を通読，執筆者の多くに補訂を願った。内容が，専門外の読者にも伝わりやすいようにとの意からである。その間，当研究所研究支援推進員である高山 泉氏が，幾篇かの手稿のデジタル化に努め，編集作業を支えられた。研究班が解散してから今日に至るまで，報告書出版がかくも遅れたことをお詫びしたい。とりわけ早々に原稿を寄せられた方がたには，多大のご迷惑をおかけした。客員教授部門運営の難しさを痛感するとともに，自らの媒介力の至らなさを反省している。

なお，京都大学附属図書館ならびに人文科学研究所図書室からは，当研究班の全員が多くの有効な支援を受けた。また，このかたちでの出版の実現には，当研究所出版委員の山本有造氏，事務室会計係長の田原 親氏のご高配があった。末筆ながら，記して謝意を表したい。

（2002.1.25）